

知的障害教育における対話的な学びの探求（2）

—小学部における「『やってみたい』という思いを育む授業作り」—

牧田英美里・久家 康雄・石川 雄大・石川由美子・司城紀代美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

知的障害教育における対話的な学びの探求 (2)[†]

—小学部における「『やってみよう』という思いを育む授業作り」—

牧田英美里*・久家 康雄*・石川 雄大*・石川由美子**・司城紀代美**

宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校*

宇都宮大学共同教育学部**

本稿では、知的障害特別支援学校小学部における対話的な学びの在り方について、授業実践から見えてきた児童一人一人の学びの姿や手立ての検討を通して、小学部における対話的な学びに対する考え方を提案する。今年度は、単元・題材のなかで、一人一人の学びを見つめながら授業改善を行い、学部テーマをさらに深めるような観点での話し合いを行った結果、「クラス全体で目標を共有しながらも、そこに至る活動や手段が多様である」という一つの方向性をもって対話的な学びの授業が展開された。実践を通して、それぞれのやってみようという思いが重なり合い、それが自然なかたちで関わりをつくっていくことが、小学部で大切にしたい姿であり、中学部や高等部に向けた土台になると考えた。

キーワード：やってみよう、安心感、授業作り、知的障害特別支援学校

I はじめに

本校の小学部児童は、知的障害の他に、自閉症、言語発達遅滞などの障害を併せ有する児童が在籍している。近い人に対して親しみをもって接することができる児童が多い一方で、自分の思いをもってそれを表現することが難しかったり、関わりが一方的になったりするなどの実態がある。休み時間を中心に、友達同士で関わる場面もあるが、学校生活全般を通して関わる主な相手は教師になることが多い。

低学年では友達同士で関わりながら活動することは難しいものの、学年が上がるにつれて、少しずつ友達同士での関わりが見られるようになってきている。

小学部では、これらの児童の学びの在り方を考えるにあたり、「『やってみよう』という思いを育む授業作り～個々の思いを活かして」をテーマに掲げ、三年間の研究計画を立て、実践を行ってきた。その結果、一年次の研究を通して、「やってみよう」という思いを育むためには、分かりやすい環境を設定することが必要であることが分かった。児童の不安を軽減し、落ち着いて学習に参加できることは、「やってみよう」という思いの土台になっていた。また、様々な選択肢がある環境の設定や主体的に行動する機会の保障が、活動への意欲を高めることも分かった。二年次の研究では、事例研究を通して、「やってみよう」という思いを育んでいくためには、子どもたちが何を感じ、何を思い、何をしたのか等、子どもの内面にしっかりと目を向け、子どもからの表出を大切に、その表出に教師が真摯に向き合っていくことが大事であることを、改めて確認することができた。最終年次に向けては、表出方法の違う子どもたち一人一人の思いを、教師がしっかりと受け止められるように技量を高め、各々にとっての有効な

[†] Emiri MAKITA*, Yasuo KUGE*, Yuto ISHIKAWA*, Yumiko ISHIKAWA** and Kiyomi SHIJO**: Exploring Dialogical Learning in Education for children with Intellectual Disability (2): Creating Lesson that foster the desire to try of primary school student

Keywords: Desire to try, Sense of security, Creating Lesson, School for children with intellectual disability

* Special Needs School Attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: ym_ishikawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

(連絡先: shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

手立てを検討し続けることが重要であると考えた。

研究の最終年次である今年度は、これまで取り組んできた実践を基に、授業作りのポイントを整理していく。そして、実践から見えてきた授業作りの在り方を、知的障害特別支援学校における対話的な学びの一つのかたちとして提案する。

Ⅱ 目的

本研究の目的は、授業作りと児童一人一人の学びの姿や手立ての検討を通して、本校の小学部における対話的な学びの在り方について検討し提案することとした。

Ⅲ 方法

学部テーマ『『やってみよう』という思いを育む授業作り～個々の思いを活かして』を踏まえ、一人一人の目指したい姿を設定し、授業作りのPDCAサイクルを基に、教育実践を行った。

Ⅳ 結果

1 「くるくるころころワールドを楽しもう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

本題材で行った絵本の「読み合い遊び」とは、大人と子どもが読み合い、遊ぶという観点に立った活動である。見立てやごっこの世界を通してイメージを育て、子どもの情動の調整や認知の発達を促し、子どもの関わり合う力を伸ばすことが期待される。

本時（8／全8時間）は、絵本にある「回る」、「転がる」に関連した遊びや事物のなかで、自分のやりたいことを見つけて遊ぼうとしたり（思考力、判断力、表現力等）、遊びの場を共有するなかで、教師や友達の遊びに興味をもとうとしたり（学びに向かう力、人間性等）することを目標にして実践した。

(2) 授業作りの工夫

導入では、絵本「りんごがコロコロコロリンコ」（作：三浦太郎）を読み合った。その後、協力して榎（とい）を持ち、りんごに見立てたボールを転がし、箱に入れる活動をした。ボールが転がる斜面を作るために、高い位置で支える役、低い位置で支える役、ボールを転がす役等を設定することで、他者の思いに触れられるようにした（図1）。自分のやりたいこと、友達にやってほしいことが伝わるように、教師は発言を促したり、代弁したりした。

展開においては、プレイルームに設置した様々な遊びのなかから、児童自身が遊びたいことを見つけて遊ぶことができる状況を設定した。その際、「やってみよう」という気持ちを引き出すために、新奇性のある教材を用意したり、遊び方や面白さを伝えたり、遊びに誘ったりすることで、活動の広がりを作っていた。

振り返りでは、ゴム付きのプロペラで回転や風を体験しながら、絵本「まわるまわる」（作：みやにしたつや）を読み合った。実際のプロペラを提示したり、本時の活動と関連させたりして、絵本の「回る」というテーマが分かりやすくなるようにした。



図1 協力してボールを転がす様子

(3) 実践を振り返って

回転にちなんだテーマで、絵本のイメージを広げつつ、感覚遊びからごっこ遊びまで、様々な遊びを自由に楽しめるように題材を構成した。どの児童も、教師が用意した遊びに楽しそうに関わる姿が見られた。一回目の授業研究会（4／全8時間）では、教師と一緒に遊びながら活動の面白さを示したり、友達の遊んでいる様子を伝えたりすることで、子どもたちの遊びが繋がるとよいという話題が出た。本時の授業では、新しい遊びにも興味が広がっていくように働きかけたり、協力して取り組む必要がある遊びを作ったりすることを試みた。その結果、児童によっては、これまで遊ばなかった遊びに挑戦したり、同じ目的をもって役割を分担して遊ぶことを楽しんだりする姿が見られた。児童同士の関わり合いを引き出すことにもつながることができた。

2 単元「みんなで色を塗ろう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

本題材では、秘密基地大作戦というテーマを設定

し、絵の具遊びをするなかで、立体を塗る経験と、手足以外にも様々な用具を使って色を塗る経験を積み重ねることをねらいとしている。また、活動を通して、自分の思いを表現したり、他者の思いに共感したり、違いに触れたりすることが期待される。

本時（4／全5時間）は、秘密基地というテーマを設定し、色の違いに気付き、表したいことを、用具を使って表したり（思考力、判断力、表現力等）、同じ表現であることに共感したり、表現の違いを楽しんだりする（学びに向かう力、人間性等）ことを目標にして実践した。

（2）授業作りの工夫

導入では、本時で塗る大きな秘密基地を提示した。隠していた家を徐々に見せることで、児童の意欲を高めることができるようにした。本時の活動内容を伝えたり、汚れたときにすぐに拭ける場を設定したりすることで、安心して活動に取り組むことができるように配慮した。

展開においては、二人組（三人組）で屋根を塗る活動と、全員で秘密基地の壁を塗る活動を行った。友達の活動の様子が見えるように配置したり、教師が言語以外の表現も読み取って児童同士をつないでることで、友達の様子に目を向けたり、友達の発想からヒントを得て活動を広げたりできる環境を作った（図2）。また、活動途中に、自分の頑張ったことや友達の活動の様子を振り返る時間を設定したことで、自分の思いを表現したり、友達の発想を次の活動に活かしたりすることができるようにした。

振り返りでは、完成した秘密基地を見ながら、自分の塗ったところや友達の頑張った様子を発表し、自分の思いを表現したり、友達の活動の様子を知ったりする場面を設けた。最後に壁と屋根を合体させることで、それぞれの児童の遊びの結果が、一つの秘密基地になったことが分かるようにした。



図2 大きな家の色を塗る様子

（3）実践を振り返って

児童が十分に遊び込むなかで、教師や友達との関わりを広げることをねらって題材を設定した。題材の始めに、手足を使った絵の具遊びを充分に行ったことで、「楽しい」、「満足した」という気持ちをもつことができ、自分の遊びに満足することができた。これにより、次時以降においては、教師や友達が使用していた用具に関心が高まったのだと考える。一回目の授業研究会（2／全5時間）では、教師や友達の様子を見て、一緒に遊ぶための工夫について話し合った。友達の様子に目を向けることができるような物や人の配置、活動内容、教師の言葉掛けがあるとよいという話題が出た。また、活動中のエピソードを全体で共有できるとよいという意見もでた。本時の授業では、二人組（三人組）での活動、全体での活動と関わりを広げていったことで、友達の活動に目を向けたり、一緒に活動したりすることができるようになってきた。また、一つ目の活動の終わりに相互評価を行ったことが、友達の様子を知り、その気付きを次の活動につなげるきっかけとなった。授業の最後に、完成した秘密基地を見て、クラス全体の達成感につなげることができた。

3 「みんなで街を作ろう」における授業作り

（1）単元設定の理由

本単元では、児童が興味をもった建物や乗り物などの身近にあるものを、扱いやすい様々な材料や用具を使い、工夫して作品を作っていく。作品作りの活動を通して、様々な材料に触れる経験を積んだり、自分なりに建物の形や色を工夫したり、街並みにあるものを作ったりしながら、みんなで協力して街を作っていくことを期待した。また、友達と作品を見せ合う「みてみてタイム」を設け、様々な視点から作品を鑑賞する。そこから得た発想を基に自分の作品作りにつなげていきたい。

本時（4／全5時間）は、表したいことに合わせて材料を組み合わせたり、友達の作品を参考にしたりにして、自分の表したいことを表現したり（思考力、判断力、表現力等）、友達の作品の発想に興味をもって、作品作りに意欲的に取り組んだりする（学びに向かう力、人間性等）ことを目標にして実践した。

（2）授業作りの工夫

導入では、大きな街の土台の上に、自分の作った家や教師が作った店などの作品を並べることで、街

のイメージがもてるようにした。街には家以外にどんなものがあるか、街全体を見ながら、次に作りたいものを考える機会を設けた。

展開においては、様々な材料を使って、街にあるものを作っていた。新しい形や色の材料を追加したり、友達の面白い発想を全体に伝えるような言葉掛けを行ったりすることで、児童の発想を広げるような働き掛けを行った。作品作りの途中に「みてみてタイム」を設け、自分が工夫したことや友達の作品を見て感じたこと等を発表することで、友達の発想に興味がもてるようにした(図3)。

振り返りでは、実際に作った作品を見せながら、作ったものや工夫した点等について、みんなの前で発表する場を設けた。



図3 友達の作品を見る様子

(3) 実践を振り返って

友達と一緒に建物や車等を作り、みんなで大きな街を作るというねらいをもって単元を構成した。一回目の授業研究会(2/全5時間)では、「児童は家や街のイメージがつかめていないのでは」という話が出た。そこで、実際に街中を観察する機会をもった。さらに本時の導入では、大きな街の土台を示し、信号やコンビニなどの店を設置して、街のイメージを伝えた。その結果、クラス全員で「街を作る」という目的をもつことができた。互いの発想からヒントを得ながら、一人一人が作りたいものを考えて、街を作ることができた。

V 考察

小学部では、学部テーマ「『やってみたい』という思いを育む授業作り～個々の思いを活かして～」を踏まえ、授業作りのポイントを検討しながら、対話的な学びに基づく教育実践を積み重ねた。

研究の最終年度となる今年度は、単元・題材のなかで、一人一人の学びを見つめながら授業改善を

図ってきた。一回目の授業研究会において、授業を行った教師からは「さらに意欲を高めるためには」、「さらに互いへの関心を高めるには」等といった、学部テーマをさらに深めるような観点での話し合いが行われた。

三つの授業は、学習の形態や児童の実態等に違いはあるものの、一つの大きな方向性をもって授業が計画されていた。それは「クラス全体で目標を共有しながらも、そこに至る活動や手段が多様である」という点である。

1・2年生の「くるくるころころワールドを楽しもう」では、たくさんの遊びを用意し、自由に遊ぶなかで、結果として友達が遊んでいるものに興味をもってやってみようとする姿を引き出すことができた。3・4年生の「みんなで色を塗ろう」では、秘密基地作りという子どもにとって魅力的なテーマを共有し、十分に活動できる環境を設定することで、互いの様子を見聞きしながら活動する姿を引き出すことができた。5・6年生の「みんなで街を作ろう」では、大きな街の土台や友達の作品から発想を得ることで、街作りに向かって一人一人が作りたいもの考える姿を引き出すことができた。

それぞれのやってみたいという思いが重なり合い、それが自然なかたちで関わりをつくっていく。これが、小学部で大切にしたい姿であり、中学部や高等部に向けた土台になると考えた。

そのために、教師は、児童の興味関心や実態に合わせて活動を設定したり、目的をもって活動に取り組めるように工夫したり、関わりを広げるために仲介したりすることが必要であった。

小学部では、「クラス全体で目的を共有しながらも、そこに至る活動や手段が多様である」授業を、知的障害教育における対話的な学びの一つのかたちとして提案したい。

付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校における令和三年度校内研究の小学部研究(メンバー：舟橋周史、石川雄大、久家康雄、増淵有美、鈴木佑香里、手塚則子、牧田英里里、石川由美子、司城紀代美)として共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。

文献

増淵有美・石川由美子・司城紀代美（2021）知的障害特別支援学校におけるエピソード記録による一人一人の対話性の探求(2)-小学部事例研究「安心感の中で育む『やってみたい』という思い」-宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要，第8号，489-496.

小鍋壮史・手塚則子・齋藤由紀・石川由美子・司城紀代美（2020）知的障害特別支援学校における対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造(2)-小学部における「『やってみたい』という思いを育む授業作り」-宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要，第7号，575-579.

令和4年4月1日 受理

Exploring Dialogical Learning in Education
for children with Intellectual Disability (2):
Creating Lesson that foster the desire to try
of primary school student

Emiri MAKITA, Yasuo KUGE, Yuto ISHIKAWA,
Yumiko ISHIKAWA and Kiyomi SHIJO